

〈特別企画「AJELの歩みを振り返る」〉

I 西日本・中部座談会

- ・ 2017年12月16日(土) 13時00分～15時00分
- ・ 同志社大学烏丸キャンパス志高館 SK103 教室
- ・ 登壇者(五十音順、敬称略): 小林致広、住田育法、二村久則、松久玲子
- ・ オブザーバー: 落合一泰(理事長)、宮地隆廣(理事)
- ・ 司会・編集: 受田宏之

はじめに

落合: 1980年の本学会設立時、会員数は160人でした。それが、2017年には570人を超えました。会員数が3.6倍になり、21世紀生まれの会員はまだいないものの、本学会の設立以降に生まれた会員の比重が高まっています。今日お集りの先達の皆様が頑張り、ここまで学会を育ててくださったおかげであると、感謝しております。ついては、本学会がどのような経路をたどり今に至ったのか、その歴史を継承していくことが、若い世代の会員にとっても望ましいと考えました。

大学によるとは思いますが、近年、スペイン語を受講する学生が増えています。スペイン語を開講している大学は、全国の大学のおよそ3割ぐらいです。その割合には大きな増減はないのですが、受講者はたいへん増えているようです。大学によっては、受講希望者がフランス語、ドイツ語、中国語、韓国語などより多いとも聞いております。

大学間交流についてみますと、目賀田周一郎会員(前・メキシコ駐箚特命全権大使)のご教示によれば、メキシコとの場合、2013年3月の段階で126件の大学間交流協定があったところ、2017年10月には165件と、約3割増えました。また、日本からメキシコに渡る留学生の数も、2013年の213名から2016年の321名へと、5割以上増えたそうです。メキシコから来日す

る留学生も、同時期に247名から298名へと約2割位増えたとのことでした。

会員の増加はもちろんですが、このようにスペイン語学習者が増える、また大学間交流や留学が活発化するという変化は、大学のグローバル化を促す文科省施策の後押しもありますが、会員の皆様が教育努力を重ねてこられた成果であると、私は受け止めております。

こうしたことから、今日は、学会と社会の足取りを並行させる形で座談会を進めていただければ、学問の世界に内閉しない広い視野において、本学会の来し方行く末を考えることができるのではないかと期待しているところです。どうかよろしくお願いいたします。

自己紹介

二村：現在の肩書は名古屋大学名誉教授ですが、出身は上智大学です。大学院時代はメキシコの政治システムをずっとやっていたのですが、その後コロンビアを専門にするようになりました。イシューとしては麻薬問題とかゲリラの研究を続けています。



住田：私の場合は、京都外国語大学で1967年に創立されたブラジルポルトガル語学科の1期生として入学したという経緯があります。その母校の京都外国語大学が大学院を創設し、そちらに籍を置くことになったとき、同志社大学の今西正雄というドイツ経済史を専門とされている先生が20世紀の後発国ということでブラジルの研究を始められていて、彼に声を掛けられたところ、温かく受け入れていただきました。以来、京都を足場に日本とブラジルを行き来する生活を送っています。地域研究という形でブラジルに入った関係から、ブラジル現代史を軸に、ポルトガルやアフリカ諸国などにも目配りをした研



究を続けております。

小林: 私は1968年に京大に入学したので、住田さんの1年後ですが、文学部時代はラテンアメリカと全く関係ありませんでした。当時から、京大ではアジアとアフリカの研究がメインで、同じ土俵では勝負にならないと考え、大学院では残余のラテンアメリカを選んだわけです。大学院ではラテンアメリカ関係の授業はなく、研究者もいなかったので、誰かを頼らなければと増田義郎先生のところに伺ったことがあります。井沢実さんの膨大な蔵書を教えていただき、高山智博先生とも知り合いになりました。当初はメキシコ革命研究と思っていましたが、エスノヒストリー研究に決め、メキシコに留学しました。一貫して人がやらないテーマを選んできました。



1981年からは神戸外大で文化人類学などを30年近く教えてきました。60歳のときに出身の京大に呼ばれ、5年間、ラテンアメリカにあまり興味のない学生に地理関連のことも含めながらラテンアメリカの授業をしました。興味は分散していますが、先スペイン期から植民地時代、現代までのメキシコを中心とするメソアメリカの歴史を研究してきました。誰にも育てられた記憶がないので、若い研究者に神戸外大の『外国学研究』という発表の場を提供し、司会の受田さんや隣の松久さんにも投稿してもらいました。

松久: 私は今、同志社大学のグローバルスタディーズ研究科とグローバル地域文化学部というところに勤務しています。東京外国語大学のスペイン語科でスペイン語を勉強し、大学院は京都大学で比較教育学を勉強しました。スペイン語を勉強していたこともあって、指導教授からラテンアメリカを研究

することを勧められました。ラテンアメリカの教育を研究する中で、ジェンダー研究にも興味を持つようになり、現在はラテンアメリカのフェミニズム、教育とジェンダーの問題を中心に研究をしています。

宮地：東京大学の総合文化研究科で教員をしています。1976年生まれで今年2017年に41歳になるのですが、学会の年齢層からみると、真ん中からちょっと若いぐらいのところに位置することになります。このような形で、様々な経験を積まれた方のお話を伺うのは非常に貴重な機会だと思っています。

学会創設前のラテンアメリカ研究の状況

二村：若干記憶が曖昧になっているのですが、いい機会なので調べてみました。そうすると、1960年代というのが日本のラテンアメリカ研究にとって黎明期であり、その後一気に研究が進んでいったと言えそうです。ラテンアメリカ協会が創設されたのが1958年ですが、同じ年に上智大学のイスパニア語学科も発足しています。60年代に入ると、1964年に上智大学でポルトガル語学科とイペロアメリカ研究所が設立されています。同じ64年にラテン・アメリカ政経学会も発足しています。先ほど住田先生からお話がありました。67年に京都外語大でブラジルポルトガル語学科が創設されています。

このように、60年代にラテンアメリカの研究をする大学や研究機関というものがいくつか発足している。同時に、いくつか実物を持ってきたのですけれども、参考文献も現れます。1964年に、中公新書から中屋健一（健一）先生の『ラテンアメリカ史』がでています。この本の前にラテンアメリカの包括的な歴史を取り上げた本ってなかった気がします。また、これが重いのですが、ラテンアメリカ協会が編集した『ラテンアメリカの歴史』というハードカバーの箱入りの本が、同じ64年に中央公論社から出ています。翌65年に、スペインの歴史家マリオ・エルナンデス・サンチェス＝バルバと

いう人の書いた『イスパノアメリカ』が、西俣昭雄先生と石井陽一先生の共訳、『20世紀の歴史的緊張』という邦題で鹿島研究所出版会から出ています。66年になると、ラテンアメリカ協会から『ラテンアメリカ』というハンドブックが出ています。この年に私も大学に入学しましたので、これが非常にいい参考文献になって試験のときに重宝したことなどを覚えています。友達に貸したら、勝手にペンで線が引かれています。見本を回しますが、これが200円です。ということで、1960年代というのが、ラテンアメリカの研究を志す人への入門書、手引書みたいなものが続々と刊行された時期といえます。

もうちょっと個別のテーマに入っていきますと、1966年には堀田善衛さんの『キューバ紀行』が岩波新書から、68年には増田義郎先生の『メキシコ革命』が中公新書から出ています。69年には大原美範先生の『ラテンアメリカの開発政策』、これはプレビッシュの翻訳ですが、アジ研から出ています。以上のように、60年代にようやくラテンアメリカ研究が花開いてきたということがいえるかと思えます。

これはどういうことか考えてみますと、地域研究というのはアメリカ、イギリスの戦争を目的とした政策科学として発展してきたという歴史がありますので、敗戦国の日本では戦前には根付いていなかった。戦後、占領を経て、さらに朝鮮戦争も終わって、ようやく日本が平和な状況、60年代の高度経済成長時代に入ってきて、地域研究にとっての学問的な環境も整備されてきたというふうに思っています。

最後に付け加えますと、1969年に大原先生が翻訳された『ラテンアメリカの開発政策』ですが、原著は63年に *Hacia una dinámica del desarrollo latinoamericano* というタイトルで出版されています。それから、66年には名著として知られるチャールズ・ギブソンの *Spain in America* が、67年にはガルシア・マルケスの *Cien años de soledad* が、68年には『ゲバラ日記』として翻訳される *Diario del Che en Bolivia* などが出ています。60年代というのはラテンアメリカ研究のエポックメイキングな時期として位置付けられるので

はないかと思えます。

松久：二村先生に大きな流れを示していただき、私がどの辺りに位置しているのかが分かりました。その頃、私は関西地区にいましたから、大きな流れに直接関わるといようなことはなかったのですけれども。指摘された60年代の流れを受けて、関西地区の方では、小林先生や京都外大の先生方、それから同志社大学の神代修先生、天理大学の上谷博先生などが中心となられて、原住民研というのが出来ました。当時の私のように、就職口がなくどうしていいか分からないような学生にとって、そういう研究会は、第三世界の問題に触れ、所属大学を超えた研究者と知り合い結び付く貴重な場となっていました。

小林：二村さんが60年代の重要性に触れられましたが、70年代に日墨交換留学（日墨研修生・学生等交流計画）が始まったことも、後に研究者となる学生が多く参加したことを考えると、80年代のラテンアメリカ学会の発足にとってかなり大きな意味があったと思います。私が留学したのは77年で、大阪外大、京都外大、天理大などからは毎年数人は行っていたと思いますが、京大からは私だけです。メキシコから帰ってきたとき、メキシコ革命を研究していた奈良大学の青木芳夫さんが、大学の先輩で一年前に留学したことも知りませんでした。

先ほど原住民研の話題が出ましたが、80年発足なので、学会と同時にスタートしたことになります。帰国した78年の翌年にサンディニスタ革命が起きたのです。その前後、日墨交換体験者の原田金一郎さんと青木さん、辻豊治さんらが、天理大学の上谷博さんを祭り上げ、ラテンアメリカ研究センターを作っていたようです。帰国直後の私は、「こんなものがあるから来なよ」と勧誘され、80年にニカラグア革命についての翻訳を出したりしました。原住民研とラテンアメリカ研究センターが、私の主要な研究者ネットワークでした。原住民研では、天理大の上谷さん、京都外大の大垣貴志郎さん、同

志社大の神代さんが長老格で、考古学の大井邦明さんなど、私よりも年上の人が何名かいました。

ラテンアメリカの研究者が少ない関西では、民博が1974年に大阪に来たことが大きな契機になりました。私にとっては、近くに膨大な資料があるということが大きな意味を持ちました。そこに、大給近達さん、友枝啓泰さん、藤井龍彦さん、黒田悦子さんが来られ、80年に学会が発足する前から、民博での研究会に参加することができました。

個人レベルでは70年代末から80年代初頭に、日墨交換留学、民博の共同研究、原住民研とラテンアメリカ研究センターでの協働を経験しました。関西には、私たちの世代の前にはラテンアメリカの専門家が少なかったというのが実情で、例外的に山崎春成さん、木田和男さんなど、初期に学会理事を務めた方々がいました。ほかには理科系で新世界猿の研究やアンデス研究の流れに属する人がいました。そういった中で私は育てられたというか、自己形成をしてきた記憶があります。

二村：私は落合さんと同じ年に交換留学でメキシコに行ったのですが、同期に山蔭昭子さんがいました。それから、亡くなられましたが山蔭孝夫さん。彼らも、その時期の関西のラテンアメリカ研究者として挙げられるかと思います。

住田：私の場合、ブラジルというところが特徴になると思うのですが、上智大学でポルトガル学科を創った経緯も、恐らくブラジルが背景にあったように思います。ブラジルは1964年に軍事政権になり、それが85年まで続きます。日本では東京オリンピックの頃です。交通面では少し前から、ヴァリグという航空会社が、ペルー、ロス経由で直行便を飛ばし始めていました。

こうした文脈で、ブラジルの開発論に取り組むようになりました。お世話になった今西先生は元々マルクス主義者だったのですが、ロストウのテイクオフ論に注目され、テイクオフ以後は近経のほうが分析に役に立つといわれ

るわけです。比較的近経の立場で、ブラジルをはじめとするラテンアメリカの開発を論じる研究者として、神戸大学の西向嘉昭先生もいました。

70年代には中屋健一先生も、京都で授業を担当してらしたことがありました。その授業を取ったところ、船で苦勞して渡ったことなどブラジルでの体験談が結構な時間を占めていて、面白かった記憶があります。増田先生の名前も話題にのぼってきました。

東京では佐野泰彦先生ですね。佐野先生は上智大学で教えてらしたんですが、東京大学出身で、西向先生と同じように、ブラジルの発展を進めるには近経の立場で現代社会を見るのがいいというふうな考えを強くお持ちでした。それに大原美範先生を合わせたグループが、ブラジル研究で当時いろいろな発表をされていました。

今との違いとして、当時、今西先生が「住田君、あまり政府批判をしちゃいけないよ」、「ブラジルに行けなくなるよ」、「留学できなくなるよ」というわけです。リオデジャネイロとかサンパウロにスラム（ポルトガル語で favela あるいは comunidade）という貧しい人が住む地区があり、非常に厳しい状況に置かれているということを公な場で発表するのはよくない。というのは、ビザが貰えなくなるかもしれないから。そんなことが雑談の中で出てくる時代だったわけです。それは、開発論を推し進めて、軍政の開発優先主義を支持するような見方が一定の影響を持った時代でもありました。

先住民研究については、MNA（M）等を経て京都外大で教えられていた大井先生が語ってくださったんですが、考古学をやりたいということでサンパウロ大学へ行くことを予定して調べてみたところ、ブラジルには考古学的な研究の足跡があまりないことが分かったと。やはりペルーやメキシコの方がいいということで、マヤの地域を選ばれたとのこと。ですから、増田先生のインカ研究書なども学生の頃に興味を持って読んだのですが、ブラジルをやるときにはあまり関係ないんだといった語りが普通になされていたのです。

その一方で、ブラジルには、ジルベルト・フレイレにしてもセルジオ・ブ

アルケ・デ・オランダにしても、最近のロベルト・ダマッタにしても、ブラジル社会の混淆性を非常に強調するという伝統があります。近年では、それとは全く違うところで、BRICs であるとか新しいグローバルな展開といった枠組でブラジルが捉えられるようにもなります。笑い話のような本当の話なのですが、1992年頃、コロール大統領がアルゼンチンに行った際、スペイン語とポルトガル語が似てるからというのでスペイン語で演説したところ、文法的にひどかったようで、恥ずかしいと感じたブラジル人がスペイン語を学ぶようになったといわれています。

最後に、中川文雄先生と国本伊代先生に頼まれて、『ラテンアメリカ研究への招待』という本のブラジルの章を担当した時の話です。ブラジルあるいはポルトガル語圏におけるラテンアメリカ研究所について書いてほしいという依頼で、もう90年代の話だったはずですが、そのときに調べて分かったのは、ポルトガルにもブラジルにもラテンアメリカ研究所は1つもないということです。ブラジルは大西洋を向いてラテンアメリカには背を向けていて、ポルトガルはスペインに背を向けているということが、そのとき分かったのです。とにかく、他のラテンアメリカ諸国とは違うブラジルの研究者であることが、私にとっては重要な意味を持ってきたのです。

松久：お話を聞いていて、私は70年代に研究を始めた者ですが、70年代の後半ぐらいから、中米紛争が非常に厳しくなってきた、それについていろいろな情報を集めたり研究がなされるようになります。加茂雄三先生、細野先生、原田金一郎先生を中心に中米の地域研究の本が出版されたり、中米紛争を契機に中米のフェミニズム運動の動きが顕在化してきたりと、中米紛争は、研究を進める一つのきっかけとなったと理解しています。

学会設立の経緯

小林：私はまだODでした。事前の集会もあったのですが、増田先生に会いと設立集会に誘われた程度で、どんなふうにできたかについては関知

していません。

二村：私もまだその時点では博士後期課程それから助手ぐらいのときでしたので、あまり詳しくは知りません。日本ラテンアメリカ学会の会報第1号をみてもみると、1978年の4月17日に学会設立準備会第一回会合が開かれ、6月30日に発起人大会が開催されています。以来、発起人大会が9回にわたって開かれ、慎重に準備を重ねた結果、1980年6月8日に上智大学で創立大会が開催されたと書いてあります。6月の最初の週末に学会が開かれるのも、このとき以来の伝統なのかなという気もしています。

ラテン・アメリカ政経学会は、先行して1964年に発足しています。私も耳にした程度の話なんですけど、その政経学会の中で路線をめぐる若干の対立、ごたごたがあって、日本ラテンアメリカ学会設立の要因の1つになったといわれています。さっきの会報第1号なのですが、初代理事長の増田先生が、理事長挨拶の中で意味深長なことを書かれているんですね。「私の希望を述べさせていただきますと、さしあたってふたつのことを強調したいと存じます。まず第一は、この学会を、あくまでも開かれた、自由な団体にしておきたいということです。特定の人間が学会を支配したり、年功序列や権威主義を持ちこむことは好ましくありません」というふうに書かれているのですが、なかなか意味深長ではあります。増田先生は東大の出身ですが、ほかに私の恩師でもある上智大のグスタボ・アンドラーデ先生や水野一先生といった方々が初期の学会をリードされていたと思うんです。私も本当に駆け出しなので、こういう学会ができるからこちらに入りなさいと言われ、ああそうですかといって入ったくちなんです。それまでは政経学会に入っていたのですが、日本ラテンアメリカ学会に入るときに、上智の先生と東大の先生は皆さん政経学会からこっちに移るといふふうに聞きまして、そういうものなのかというふうにも私も移ったのです。東大と上智に所属する先生、学生、院生は、「二重国籍」ではなく、政経学会から日本ラテンアメリカ学会に大体移ったと記憶しています。その間にどういういきさつがあったか、詳しく

は分かりませんが、

住田: 70年代に、ブラジルの軍事政権は、ブラジルのポルトガル語研究も含め、ブラジル研究に資金援助をしました。それが私の場合、留学したときに役に立ったわけですが。ブラジルの文化を世界に広めるといって、マウリシオ・クレスポというブラジル人が新世界社という出版社を作りました。ポルトガル語から日本語への翻訳書というのは殆ど手にできない状況の中、ブラジルのポルトガル語文献の和訳が積極的になされたのです。水野一先生がセルソ・フルタドの『ブラジル経済の形成と発展』を訳されたり、山田睦男先生がカイオ・プラド・ジュニオール『ブラジル史』を、さらには池上岑夫先生がセルジオ・ブアルケ・デ・オランダの『真心と冒険』を訳されるなど、翻訳が活発になっていきました。先ほど申し上げたように、ドイツ経済を研究されていた今西正雄先生が日本語でブラジルのことが分かるようになるという状況が生まれたわけです。その直後に、日本ラテンアメリカ学会が出来上がったのです。

小林: 79年の二回目の設立準備集会に行ったことを思い出しました。まだ学生で、宿泊先を予約してなかったところ、石井章先生の紹介で市ヶ谷に泊れた記憶があります。

松久: 私の場合も、年報を探してみたら、第1号がなくて、第2号からでした。まだ学生でしたし、駒にもならなかったので、その辺の事情は分かりません。

小林: 私は政経学会のことは知らないのですが、先ほど二村さんが言われたような状況は何となく感じていました。

住田: 意見の違いはあったようです。関東ですと、増田先生の近くにいらし

た国本伊代先生が創設にかかわられていたので、事情を知っているでしょう。

二村：関西の研究者ですと、原田金一郎さんが創設メンバーの1人だったと思うので、詳しいのではないかと思います。

住田：西向先生と非常に深い関係にあった西島章次先生が神戸大学の方に残られ、原田先生はマルクスの立場といますか、方向が違ったということだったのでしょう。その一方で、原田先生も国本先生もラテン・アメリカ政経学会でも熱心でした。ラテン・アメリカ政経学会の一部関係者に加え、人類学であるとか文化研究であるとか文学も含めて幅広い人に声を掛けるという方針で、ラテンアメリカ学会は設立されたというふうに伺っていました。もっとも、私が二重国籍者だからそうみえるのかもしれませんが。

二村：住田先生に一つ伺いたいのですが、京都外大が政経学会の事務局になってますよね。

住田：森田嘉一先生が長年顧問を引き受けてらっしゃいますね。

二村：いつからなんですか。

住田：結構長いです。松本幹雄という、戦後アメリカの援助で京大の研究者と一緒に日本研究をしていた慶応出身のフィールドワーカーがいました。彼がある時期ラテン・アメリカ政経学会に関わっていて、それを契機に京都外大の森田嘉一先生が顧問を引き受けられたのかもしれませんが。ただ、森田先生にお聞きすると、それ以前より大原美範先生とか、学会員ではないですがアメリカ研究の中屋健一先生とか、上智大学の佐野先生とかそういう人たちと非常につながりが深かったようです。1967年にブラジルポルトガル語学

科が創られたとき、就任直前のコスタ・イ・シルヴァ大統領が京都外大を訪問しています。1月に来て、4月に学科ができました。その頃、相当政府の援助もなされたと聞いています。こうしてブラジル研究を打ち上げたわけですが、その3年前には大垣先生の関係しているスペイン語学科ができています。これらの動きの中で、自分のところで引き受けるというような話をされたのかもしれませんが。

受田：今は東京大学に事務局が置かれていますが、「政経学会は関西に強い」というイメージを持っています。ただ、私にしても宮地先生にしても二重国籍ですし、初期の対立云々というのは分からない話なのです。私以降の世代は、耳にしたことはあるのですが、そういったものを引きずってはいません。

住田：だから、関西にいた私としては「二重国籍を皆が認めてた」というふうに感じてるんですけど、必ずしもそうでなかったのかもしれませんが。

他学会との関係

松久：私の場合、ディシプリンはジェンダー研究と教育学でして、ジェンダー研究にしる徐々に研究が進んできてはいたものの、70年代という時期に研究者の数はまだ非常に少なかったのですね。たとえば、比較教育学あるいはジェンダー研究という中でラテンアメリカのことをしようとすると、もう2、3人とか非常に少ない人数しかいない。特にラテンアメリカに関しては、まだその当時は、ヨーロッパとかアメリカ合衆国研究と比べて、研究者の数も少なかったし、遅れていたという言い方はしたくないのですが、研究の幅も狭かったのです。

そういう中で発表すると、常に同じような方たちとしか顔を合わせない。そうした中、ラテンアメリカ学会というのは、ディシプリンを問わず地域という枠で人が集える、交流を深められるということで、なかなか会う機会の

ない人たちと出会える、意見交換することができる非常に有益なところでしたし、今もそう思ってます。

小林：私にとっては、この学会が基本的にはメインだと思っています。他の学会は顔を出している程度です。分野で言うと文化人類学では、昔は『民族学研究』と言われていた学会誌に1976年に落合さんたちが当時のラテンアメリカの研究動向を紹介されていて、その中には訳された本もあり、それが私にとってはラテンアメリカの人類学との最初の出会いです。

関西に限って言うと、大学院は民博や京大にもあるが、ラテンアメリカの人類学のフィールドワーカーはあまり出ていません。京大の5年間で、ラテンアメリカ関係の博論を見たのは2人だけです。地理学もあるが、実際には交流は少ないです。

そうしたディシプリンを超えた別の研究会のほうの記憶があります。先ほどの原住民研の後を継ぎ、最古参の神代さんや上谷さん、さらに大井さんが中心になって80年代後半や90年代に活動をしたラスアメリカス研究会があります。でも、全く記録は取っておらず、HPなどの管理も誰もしておらず、21世紀に入ると休眠状態でした。ラテンアメリカ学会の部会やイベリア・ラテンアメリカ文化研究会との共催といった形で、名前だけ貸していた状態です。いわば学会とは違うミニ研究会といった形で、私は主に活動してきました。

学会とは関係ない個人的な話として、80年代に京大にラテンアメリカ研究会という学生団体ができました。今は一橋大学にいる鶴飼哲さんなど、フランス語専攻の学生が中心にやっていたのですが、メキシコから帰った後、私は研究会の顧問になられました。彼らがやったのは、もうほとんど語り草ですが、ピノチエトの訪日阻止とボリビアのウカマウの映画の上映運動でした。研究会でラテンアメリカ関係の本を2冊ぐらい翻訳しました。また、大阪外大の学生で日墨交換留学から帰ってきた人たちと読書会をしていました。その中の何人かは大学の教員になっています。大看板のある学会とはあ

まり交流はないですが、こういった活動は大事にしてきました。

二村：私は国際政治学会というところにも属してまして、その中には地域研究部会というのがあります。各地域の研究が行われてるんですけども、ヨーロッパとか北米とか東南アジアなどはなかなか繁盛してるんですが、ラテンアメリカは本当に圧倒的な少数派です。学会の度に、ラテンアメリカの分科会を組織しようとしているんですけども。なかなかこの人集めが大変で、私も世話役をやったことあるんですが、発表者をようやく確保できたら、今度は聴衆が殆どいないというような状況で。とにかく、国際政治学会の中で圧倒的にマイノリティーな状態が未だに続いているという感じです。たまたま、5年に1回ぐらい、他の地域の分科会からコラボの声が掛かるんですよ。例えば東南アジアの学会から、開発独裁について一緒にやろうなんて話が来たりして。そのときは、それぞれ聴衆が来るんですけど、こちらからコラボの声を掛けるという状態にはとてもなくて。国際政治学会の中ではとても肩身の狭い思いをしているというか、未だに他の地域からも存在が認識されていないという状況です。

住田：私は歴史ということで、政経学会に入ったところに、社会経済史学会に入りました。ある時期まで会員を続けていたのですが、二村先生がおっしゃられたことに似てますけども、ラテンアメリカのことをテーマとして取り上げにくいところがありました。当時、皆さんが私に興味を持つのは、こちらの経済学部の布留川正博先生などと研究を共にしてたこともあるのですが、世界システム論であるとか世界資本主義体制であるとか、あるいは黒人奴隷貿易研究や大西洋システムなどを質問してくる。個々のラテンアメリカの事情には関心が薄くて、社会経済史学会という非常に大きなところに入っているながら、なかなか研究発表をする機会がなかったというのが実情でした。

松久：少し付け加えさせていただいていいですか。ジェンダー研究について

ですけど、皆さんと同じような状況で、アメリカとかヨーロッパは非常に楽しみがあるけどラテンアメリカには少ししかない。ラテンアメリカ学会にしても、ジェンダー研究を正面から扱っているという方は非常に少ないと思います。ただ、やはり研究分野に広がりのある会員がかなり多い、それからラテンアメリカプロパーで各国の研究をされてる方が非常に多いというのが、メリットだと思うんです。

国本先生が1985年に『ラテンアメリカ社会と女性』というラテンアメリカの女性問題を扱った本を初めて出されました。そのときは6カ国しか扱われていないんですね。ところが、15年後の2000年に出版された『新しい社会と女性』では13カ国、2015年出版の『21世紀の社会と女性』では20カ国がカバーされています。そういう形で、ラテンアメリカ学会の会員が、ディシプリンでは二股を掛けながら、という話ではあるんですけども、各国の状況がどうなっているかということを記録として残し、それが著者の業績となる場があるというのは非常に大きなことだと思います。ラテンアメリカのジェンダー研究プロパーの業績って、何人かももちろんいらっしゃるんですけども、他地域と比べて非常に少ない。そういう中で、広いテーマ別に物をつくっていく、書いていくということができるとよかったかなと思っています。

二村：それからもう一つ、地域研究の学会との関係に関していえば、地域研究学会連絡協議会という組織があって、毎年一応集まりがあって、この日本ラテンアメリカ学会もそれに参加しています。ただこの組織も、非常に事務的な連絡を趣旨とする組織のようで、どの地域とどの地域が協力して研究を進めていこうというような体制にはなっていません。学問的に比較研究とか共同研究を進めていくような性格のものはまだないのかなという気がします。

教育と研究の関係

住田：山田陸男先生は、国際的な展開を非常に熱心にされていました。海外で有能な専門家と同居されたりあるいはそういう先生を呼ぶといったグローバルな交流を実践されていました。

松久：非常に個人的な経験として、私が学会に加わったとき、学生の段階でしたし、非常勤講師の期間が非常に長かったんですね。ですから、専任として大学にいませんでしたし、そうすると学会とかそういうところの中心的な部分っていうのは分からなかったところがあります。ただ、ラテンアメリカ学会に入ると、新しい分野に対していろいろな先生から示唆をいただく、本や何かを書くときに誘っていただくということがありました。私がフェミニズム運動に興味を持ったのは、実は原田先生が学会の中で「こういう中米紛争の話を書きたいんだけど、どうしても女性について入れたい。書いてくれる人がいないんだけど、やってくれない？」って言われてからなのです。

その頃は本当に非常勤ばかりしていて、自分の研究方向も定まりませんでした。いただいたものに関しては、なんでも頑張ろうみたいな形でやっていたんですね。そういう中でフェミニズムに関心を持ち、女性学やジェンダー研究にも取り組むようになりました。学会という場とかメンバーを通して、本を作る、力のある先生方が若い人をリクルートしてくださる、そうして少しずつ人が育っていく。そういうところもあるのではないかと思います。

二村：私の個人的な経験を述べさせてもらおうと、先ほども話題にのぼったのですが、日本とメキシコの日墨交換留学が1971年に発足しています。落合先生も私もその第2期目の1972年に行ってるんですけど、あの役割は非常に大きかったと思います。未だに続いていますし。

もう1つ大きかったのが、私は1975年にメキシコ外務省の奨学金を貰ってもう一度メキシコに留学しました。これはまだ私が行ったとき本当に1回目か2回目かのできたばかりの制度で、とにかく手続きが大変で、何度もい

ろんな役所に足を運んだり、公証人役場にまで行った覚えがあります。でも、77年までその奨学金で留学させてもらい、これも研究者として歩むにあたって非常に大きかったという記憶があります。関西の辻さんも、同じ外務省の奨学金で同じときに行ったくちなんですけれども。日墨交換留学だと最初に行先が割り振られて制限されるんですけども、この外務省の場合、自分でどこに留学したいという希望を出してそこの大学で勉強できるので、非常に自由度が高いのです。月に1回、お金を貰うと同時に、外務省に報告に行かないといけないのですが。

そのときに、最初の方のテーマとも関連するのですが、1973年にチリのクーデターがあって、アジェンデ派の生き延びた大物たちが相当数メキシコに亡命してるんですね。チリからの亡命者だけじゃなくって、カリブのほうからも、例えばドミニカとかから主に左派系の政治家や研究者の大物がメキシコに亡命してました。コレヒオ・デ・メヒコとかUNAMにはそういう人たちが大勢いて、私がいた時期はそういう人たちの講演とか授業なんかを聞く機会があって、これは非常にためになりました。例えば、アジェンデの時代に外務大臣に就いていたクロドリロ・アルメイダなんて人がUNAMにいて、この人の話を結構聞く機会があって、チリについては殆ど何も知らなかったんですけど、彼の話を通していろんなチリの状況も知ることができました。

小林：今、思い出したのですが、77～78年にメキシコに留学した際、実は三股を掛けていました。日墨交換留学のほかに、外務省の奨学金とJICAの青年海外協力隊です。協力隊の話はボリビアでした。結局は、一番簡単な方を選びました。私の後の年代にも、交換留学以外に、海外青年協力隊とかそういう形で、大学院在籍中だけどポストがないから2、3年体験を積むといった人が結構いて、それを経て研究者になった人が私の周りにも3、4人はいます。特に80年代の後半からは、そういう人が結構多かったような気がする。ホンジュラスで調査に携わっていた人たちの多くは、今では研究者

になっています。

松久: そうですね、海外滞在の経験は一番ベースになっていて、そこから大学関係者も含め人脈が広がり刺激を受ける、次の研究の段階でまた外に出て人脈を広げていくというプロセスから影響を受けたと思います。メキシコに留学しそのまま残って、メキシコで研究者になってる方もいらっしゃいます。そういう意味で留学制度というのは重要です。

受田: 他地域と比べ認知度の低いラテンアメリカのことを知ってもらうため、どのような努力をされてきましたか。

住田: 継続してチャレンジすることは大事だと思います。出版にしても、やはりブラジルの場合、メキシコなどと比べて非常に閉鎖的といいますか、ナショナリズム的な感覚が強いのではないのでしょうか。外から来る外国人に対して、資金援助を積極的にするという制度はあまり今もないですね。私の場合も、70年代に1年間留学できたのは、日本の文部省の支援を受けたからです。そうすると、大使館や他の公的組織の在外研究員といった形、あるいは企業を通じての、いわば経済的な人的交流の重みが増してきます。

5年前に堀坂浩太郎先生がブラジルについての啓蒙書を出され、私は授業で使っています。それは、経済的に良くなっているからぜひブラジルのことをあなたたちも学びなさいといった内容の本でした。文学では、東京外国語大の武田千香先生らがブラジルの文学作品を日本語に翻訳しているのですが、なかなか十分なマーケットになっていかない。

こういう状況の中、松久先生もおっしゃられたように、我々の作ったネットワークを継続的に活かしていく以外にない。ブラジルの場合、サンパウロ大学とかブラジリア大学とかいろいろありますので、それらを生かして学術的な交流が役に立つんだということをアピールする以外にないと思います。

松久：もう一つ、私の経験からいうと、本当に仕事がないようなときでも、原住民研であったり、小さくてもラテンアメリカの研究会に加わっているということが、研究を継続していく大きな刺激になっていたと思います。大部分の皆さん、先生方は、すぐ大学院を出られてそのまま大学で仕事を持った方だと思いますけれども、特に女性の場合、私のような経験をしている人間はまだ多かったと思います。

そういう中で、学生さんだけでなくポスドクの人にとっても、関心のあるテーマが身近にあって、そこで誰かと一緒に仕事ができる、研究できるということが、継続をしていく大きな力になると思うんです。で、最近を見ますと、各大学で大きな研究の拠点はできているんですけども、大学の枠を越えた活動は元気がないかなというところがあります。そこで、大学にいる人間の責任として、少しでもいろんな人たちのネットワークを作っていくことが必要なんじゃないかと思います。

小林：自分が留学した経験、いわばアウトバウンドのことをしゃべったわけですけど、逆にインバウンドというか、外国から留学生等を受け入れて育てるということについていうと、年1回開かれる大会の記念講演という形で大御所を呼ぶのはいいのですが、分科会などで若手研究者を呼んで発表してもらえそうな場があったらいいかなと思いますね。幸い、繰越金というか予算はあるようなので、その中から少し割いて、日本の研究者と交流してもらおうということがあってもいいのかなと。これは過去の話じゃなくこれからのことですけど、そう思います。

学会活動全体に対する評価

小林：私は理事をたぶん2.5期勤めました。一回目は誰かの在外研究にともない補充理事になり、その後、1990年代後半に理事を2期やり、どちらも編集担当でした。最初は国本伊代さんが委員長で、次は私が委員長でした。その時期、非常に学会誌は分厚いのです。ところが21世紀になると、へろ

への学会誌になってしまっただけ。

あの頃は結構採用されていて、打率でいえば5割を超していた気もするのですが、最近では2割何分ぐらいの打率ではないでしょうか。これは、審査が厳しくなったのか、それともレベルが下がったのかよく分かりません。学会として、専門誌のレベルを保つというのは基本でしょうし、特定のディシプリンに固まっている学会ではなく、多様な地域研究なわけですから、なかなか審査しにくいというのも分かります。ですけど、私としては、薄いよりはごつい方がいい。学会の総会で発言したこともあります。年に2回発行してもいいのではないかと思います。そうでないと、だんだん投稿する人が少なくなる。予算的にも十分できると思います。

審査の形式も、もう少し考えてやってもらえればいいと思う。というのは、私は20世紀には学会誌にシンポジウム報告を含めて3回掲載されたが、21世紀には2回とも非採択になりました。恨んではいませんけど、その基準が、審査員2人で1人が可で1つが不可だったら落とされるというものですから。編集委員長や編集委員会が、いわゆるドロウなとき、もう少し機械的ではない対応を考えていかないと。つい最近、この5年のうちですけど、ある人が投稿する前に私に「これはどうですか」と聞くので、「うん、これは絶対落ちるよ」と言ったのが通っています。つまり、甘い人もいれば本当に厳しい人もいて、読む人の基準が全く違うのに、統一しようとするとう無理が生じます。

ということで、なるべく敷居を低くして通してあげて、論文はあくまでも本人の責任という形の方が個人的には好きです。ミスをしたらその人の責任で、日本ラテンアメリカ学会のレベルの低さを示すものではないと。若い人のために、投稿する機会を増やしてほしい。

それから、東・西と中部、3つの地域部会での参加者が少ない。今日も、この後4人発表があり、その時間は30分しかない。私としてはもっと長い発表時間を確保してほしい。今年4月にもここで部会があったのですが、報告者は私1人でした。幸い、30分で打ちやめにはなりませんでしたが。年次

大会のように25～30分という短時間ではなく、若手が言いたいことを発表できるよう余裕を持てる形で発表してもらうなど、人が集まる工夫をして欲しいと思っています。最近少し気にくわないのが、科研の報告会を兼ねたような形の報告です。それは独自にやってもらえばいいわけです。

松久：私も年報が薄くなっているのが気になってます。理事会の負担も考えねばなりませんが、企画みたいなものを立てて、シンポジウムや何かがあったときにそれを原稿化していくことも必要じゃないかと思います。実はこの間、ジェンダーと政治参加の問題でシンポジウムを組ませていただいたのですが、あまりないことで私としてはすごく嬉しかったんですけども、その事実があったという記録しか残らない。それで嫌だと思って論文ぐらい1本書こうと思って、投稿したわけです。そういったシンポジウムに関して、論文以前のものであっても特集みたいな形で記録していくのもいいのではないのでしょうか。

二村：先ほど海外から若手研究者を招いたらという提案が出ましたが、地域部会にせよ年報にせよ、国内の若手研究者をどう育てていくかということも、この学会の将来に向けて、みなで知恵を絞っていく必要のある課題だと思います。妙案があるわけではないのですが、小林先生が言われたようにどしどし載せてあげるというのも一案かと思えますし、地域部会の時間も、中部の場合は1人1時間の枠を取ってますので、そのぐらいあればじっくり発表してもらえるかなと思います。年2回で1回につき3人とすると、そこそこの人数に発表してもらえます。ところが、東日本の場合は毎回5人とか6人とか、結構発表者が多いです。そうすると、どうしても1人当たりの時間が短くなってしまいます。だったら、年2回とか決めないでもう1回やってもいいと思います。とにかく若い研究者になるべくチャンスを与えるという方向で知恵を絞っていったらどうかと思います。

住田: 年報について、そんなにひどい状態ではないとは個人的に思いますが、投稿をしやすくする、論文以外のものも受け入れるというアイデアも必要かもしれません。

人的交流についていうと、ブラジルが日本から一番遠いということになります。実は第2次世界大戦の終結後、ブラジルは常任理事国入りをアピールしたのですが、中国のように承認してもらえなかったということもあります。つまり、戦前も戦後もポルトガル語を大学で学んだ日本人は少なく、小説を翻訳してもなかなか売れないということになります。

ただ、ポルトガル語はスペイン語に非常に似てますし、最近では実践的なポルトガル語を中国人が話すようになってきている。アフリカのポルトガル語圏も注目されています。ポルトガル語もスペイン語も多くの人たちに話されているので、言語ができることによって、大学で教える、地域研究の学位論文を書くなど、選択肢が広がっていきます。ブラジルの場合、外国人が学位を取ることに非常に厳しい枠があります。最初から入学しないと受け付けられないというような。メキシコなどより厳しいと思います。でも、メキシコに行ったらブラジルについての論文を書いてもいいでしょうし、枠を乗り越えて柔軟に対応していくことが求められます。マカオに行ったらマカオの大学で、ブラジル研究で学位論文を出してもいいという、そんな姿勢ですね。実は、いま中国では非常なポルトガル語ブームのようで、20以上の大学で教えている。じゃあ誰が教えてるのかというと、中国人の学位取得者が教えているのです。中国人はマカオ大学で中国語で博士論文を書いて評価され、博士号を取得し、ポルトガル語の教育者として中国で仕事をすると。そういう柔軟なグローバルな知恵を活かしていけたらと思っています。

宮地: まだ時間があるので、この場を借りて聞きたいことが1つあります。私よりも20ぐらい年齢が上といますか、経験がある方から見た私たちはどんな人間なのかということです。端的に申し上げますと、研究者として経験を積まれる中で、いろいろな方を指導されてきたかと思うんですけど

も、新しい学生、新しい研究者の卵が入ってくる、接点が増えてくる中で、時代によって傾向とかスタイルが変わってくるというのがあるのかというのが私の質問です。

例えば、私は2001年に大学を出てボリビアの研究を始めた人間ですけれども、私ぐらいのときからボリビアを研究する院生が増えてきました。ある時期にまとまって特定の国の研究者が出てくるということが他の時代にもあったかもしれない。あるいは、ベトナム戦争とかさまざまな国際的な流れの影響があったのかもしれない。そういったものが実際に学生を指導する中であったかどうか、世代的な違いというものについて経験としてお話しただければと思います。

二村：私なんかから見て、宮地さんのような40代の研究者の方はとても勤勉だなと思います。自分のその頃を振り返ると、もうちょっといい加減だったような気がします。勤勉に研究をなさっているという印象があります。

それから、ラテンアメリカ研究全体が日本でまだ立ち遅れているという話がありましたけども、そのラテンアメリカ研究の中でも、いわばメインストリームのメキシコ、ブラジル、アルゼンチンあたりは比較的研究者は多いんですけども、もっとマイナーな国になると依然として研究者の層は薄いんです。ボリビアは最近出てきたかもしれないですけど、エクアドルであるとかカリブであるとか、未だに研究者があまりいない状況です。どうしたらマイナーな地域に若い人たちに興味を持ってもらい、研究を進めてもらえるかということについて考える必要があります。それはもう我々には難しいので、それこそ若い中堅の研究者にリードしてもらえるといいかなと思います。

宮地：住田先生の場合ですと、ブラジルの研究をされてる中で、それこそオリンピックとかサッカーとか、いろいろテーマになるものがブラジルには定期的にある気がするんですけども、それに応じて院生が増えたり減ったりとか、文化の研究をしたい人が増えるとか、そういう波のようなものはある

ものですか。

住田: ブラジルにこだわると、キャリアといいますか就職には厳しいところがあるのですが、私が常に学生に伝えているのは、ブラジルという国の持つ文化に対する柔軟性です。例えば、セルジオ・ブアルケ・デ・オランダとかジルベルト・フレイレ、最近 TV とか YouTube によく出るロベルト・ダマッタなどは、アメリカ合衆国で人類学のディシプリンを獲得した上で、洗練されたブラジル論を発信しています。日本人には面白くないだろう混血主義など。人種混濁とか多様性とか、そういうものを打ち出して、黒人も受け入れ仲良くしてるんだということを強くアピールする。それと、21世紀におけるブラジルのグローバルな展開とがどう結び付くのか。そういった知的な面において、ブラジル人の発信する内容の面白さというものを理解してほしいといえば、結構関心を示す人がいます。

それが将来のキャリアにつながるかどうかは別に考えるということですね。だから、表現はちょっと曖昧ですが、小林ファンとか、二村ファンとか住田ファンみたいな感じで若者が集まる中で、きちんと教えれば、ディシプリンへの道筋は自ずとみえてくるのではないかと。ブラジル人とかキューバ人、ラテンアメリカの国々の人たちに受け入れられているのであれば、ディシプリンとしていいのではないかと。専門調査員などにもつながっていくと思うんですけども。その他によく強調するのは、ブラジルについて得た知識というのは、専門が変わったとしても価値があるということです。

宮地: もう一つお伺いしたいんですが、ブラジルの研究をされてる人とブラジル以外のスペイン語圏ラテンアメリカの研究をされてる人の間で、ブラジルの研究をされている方は割と前向きというんですか、眠れる大国じゃないですけどこれから伸びる国というイメージで入っていく方が多いのですが、スペイン語圏の場合はどうしても差別とか格差とか革命とかいわば問題の側面に目が行って研究をする方が多いようなイメージがあるのです。

住田：21世紀に入って私は変わったのです。ルーラの登場というのを誰も予測できなかった。ただ、サンパウロ大学の先生が2002年にルーラが勝つと言ったんですね。それで本当に勝ったわけ。ルーラは政権に就いた途端に、確かに格差是正のために力を入れ始める。それで、教育に力を入れるというふうに、ブラジル人も変わってくる。2017年7月、負の遺産ですけども、黒人奴隷の降りた場所が世界遺産に登録されました。以前のブラジルとは違って、アマゾンの先住民問題も注目されるようになった。変化の理由の1つは、軍政に追い出されて、チリとかメキシコとかに行っていた人たちが戻ってきて、重要な立場にいるということがあるのかもしれない。

このように21世紀のブラジルは違うものと捉えています。この柔軟で鷹揚な変化への対応も、広大な国土と異民族混種の多様な社会ゆえの、ブラジル人たちを中心とするブラジル研究者の前向きな姿勢と考えることができるかもしれません。

松久：私はグローバル・スタディーズ研究科というところにいます。そこはアメリカ合衆国、アジア、その他の地域という3つのクラスターに分かれているんですけど、やはり中東に学生が集まっています。世の中でいろいろな問題が起こればそこに関心が行く。冗談のように、ラテンアメリカにあまり関心がないってことは平和なことだ、いいことなんだという意味のこともいってるんですけども。

そういう中で学生を獲得していくというのは非常に難しいのですが、学生と接する中で感じるのは個人的な経験の重要性です。こういう時代になると、留学に行ったことがあるか、友達がどうであるとか、そういう小さな経験を丹念に拾い上げていくしかない。その程度のことしか言えないんですけども。

小林：神戸外大の学部ゼミ生で大学院修士課程に進んだのは5人しかいない。研究者になったのは1人で、彼はラテンアメリカとは無関係な社会

学をやっています。つまり、私の育てたラテンアメリカ研究者は実質ゼロなわけです。一方、博士課程は、他大学から来た人ばかりです。出身大学に引き受けてもらえなかった人たちのいわば落ち穂拾いをしてきました。そういった形で、ラテンアメリカに特化した研究指導をしてきたことになりま

す。

いま 50 歳代の世代には狐崎知己さんのように、1980 年代の中米紛争の影響があり、その前の世代だと、チリとかアルゼンチンの政変、キューバ革命から刺激を受けた人が多かった。政治・経済畑だと、原田金一郎がその典型です。僕自身の研究は、時代の波にはあまり関係ないが、ブームがあるのは当然だと思います。ラテンアメリカ文学のブームもありました。かといって、21 世紀の今、何がブームなのかと考えてもあまり思い付かないですね。

2010 年以降のことはよく分かりません。自分の大学に指導教官がいなくても何とか見つけていけるといのが私たちの世代のすぐ下はあったのでしょうけど、今はなかなか、ないかもしれない。自分で先生を見つけて放浪するというか、武者修行に出てくれればいいと私は思っています。自分のコピーを作る必要はないわけですから、各自自由にやってくださいというのが私の基本的な方針です。

会場からの質問

松本八重子会員： 亜細亜大学で非常勤講師をしている松本です。今日は非常に興味深いお話をありがとうございました。1つ質問があります。ラテンアメリカ研究が、国際関係論といったディシプリンにポジティブにアピールするところがあってもいいのではないのでしょうか。例えば、従属論は中南米から発信された理論ですが、それがグローバリゼーション研究に影響を与えた点などをもっと強調できないものではないのでしょうか。そうすることで、中南米研究を盛り上げていくことができるように思えるのですが。

小林： 従属論のことは、言おうと思っていたけど忘れていました。原田さん

たちがやっていた時期は多分そうだったと思うし、それからちょっと後には世界システム論も流行るようになります。

松久：グローバリゼーションとの関連におけるラテンアメリカ地域の研究には、まだ厚みがありません。例えば、グローバリゼーションと国際分業、女性の移民と家事労働といった重要テーマにおいて、ラテンアメリカの地域研究者が貢献出来たらいいなと思っています。

二村：従属論についていうと、大原先生が訳されたプレビッシュなどが従属論の前段階をなし、そのあとにフランクとかカルドーズが出てくるわけで、ラテンアメリカに起源のある理論が国際関係論の方に展開していくということはあったと思うし、これからもあると思います。あるいは文学の分野でいうと、ガルシア・マルケスの魔術的リアリズムやボルヘスなども世界の文学に大きな影響を与えていると思います。ラテンアメリカ地域特有のものとグローバルなものとのつながりというのは十分にあると思いますので、若い研究者に発掘してもらえば豊富な鉱脈が出てくる気がします。

住田：グローバルということでは、東京では鈴木茂さんがジルベルト・フレイレ（『大邸宅と奴隷小屋——ブラジルにおける家父長制家族の形成（上・下）』）を訳しましたし、その他若手の中でアフロ的な問題意識を持った研究者が出てきています。ラテンアメリカの中でブラジル研究をやる場合、どうしてもアフロ、黒人というのが重要な部分になります。また黒人奴隷の歴史としてのアフリカとの関わりというのは重要です。ディシプリンとしては人類学にそうした蓄積がありますので、それらを引き続き翻訳していくのもいいと思います。

落合：今日は本当にありがとうございました。本学会の重要性を改めて示してくださった皆様に対し、理事長としてお礼を申し上げます。

さきほど、機関誌『研究年報』が薄くなってきたというご指摘がありました。担当理事がいろいろな工夫をしてくれています。本日のような座談会を記録として残そうという努力も、そのひとつです。機関誌のウェブ化という方向も、今後、考えるべきことかもしれません。1年に1回、『研究年報』を紙媒体で公刊していますが、この方式では、地区研究会での最初のアイデア公表から出版まで、1年半くらいかかることがあります。それでは論文の鮮度が落ちてしまうと、『研究年報』への投稿を避ける会員が少なくありません。私はある学術雑誌のウェブ化に携わった経験があるのですが、ウェブ雑誌に移行した結果、査読が終わった論文は、体裁を整えれば、いつでも次世に問うことができるようになりました。しかも、数百部という紙媒体よりも、はるかに多数の読者に読んでもらえるようになりました。『研究年報』のウェブ化は、今後考えるべき課題のひとつになると思います。

二村さんが、たいへん大事なことを言ってくださいました。次世代研究者の育成において、海外の若手と本学会の若手の出会う場を作り、刺激を与え合うという環境が大事になるという点です。このことは、本学会の理事会でも話題に出ています。問題は何かというと、それにはお金がかかるということです。本学会は、いまお金に困っているわけではありませんが、長期的に財政基盤を強化していく必要があります。そこで、考えられるのが本学会の法人化です。わが国の学術界を見渡しますと、法人化を進め、実現している学会が少なくありません。その適否は十分に議論しなければなりません。法人化をすればお金を集める手段を増やすことができます。現在のような同好会と同じ任意団体形式では、それは簡単ではありません。文科省も、法人の資格を持っている学会を重視する補助金政策を考えてもいるようです。

本学会においても、現状に安閑とすることなく、今日うかがった歴史を踏まえ、さらなる発展のために、さまざまな課題に取り組んでいくことが必要と思っています。

改めて、本日は、どうもありがとうございました。